

家族再統合プログラムにおける虐待をした親への支援プロセス

－ 親子の関係性への働きかけに着目して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
北川 理沙

近年、児童虐待は社会的な課題として注目されており、家族が問題を抱えながらも地域で暮らしていけるように支えることが、児童虐待ケースの家族再統合のあり方だと指摘されている。本研究の目的は、親子を対象とした家族再統合プログラムをとりあげ、どのような働きかけによって親子関係の再構築を促しているのか、その支援プロセスについて検討することである。

調査の結果、親を支え、スタッフが親にとっての安心の基地となることで、養育への内省が生じ、親が子どもにとっての安心の基地となることが促されていた。それと同時に、子どもに対してもスタッフが安心の基地となることで、子どものアタッチメント行動が促されていた。さらに、親子双方に対する働きかけに加え、他機関に対して親子への働きかけを促すことで、親子の関係の再構築がなされていた。また親子関係の再構築だけでなく、親子の真のニーズを引き出す場としての機能も担っていた。このように、親子の真のニーズを受け止めた上で、親子にとって最適な状況を考えることが虐待における親子支援で重要であることが分かった。

こういった効果は、親と子どもへの個別的な支援に加え、親子が同じ場所で交流する場を通じた支援をすることで生じたものであり、親子の再統合には親子のニーズと状況にあわせた柔軟な支援の検討が必要であると考えられた。